

ると、交通の手段の中心が道路から鉄道に移り、湯沢町内の各駅の周辺（魚野川水系）は発展を遂げることができた。

3つめの要因は、古くから湧出していた温泉や、豪雪・山岳を利用したスキー場というような、湯沢町の自然の特質を、観光業に生かすことができたことである。自然の恵みの温泉や雪・斜面を利用する観光から、夏季体育施設・キャンプ場・ハイキングコース等を整備した、通年型観光地を目

指して、より一層の発展を遂げようという意欲が十分にあるということからも、現在の発展ぶりがかがえる。

このように、豪雪、山岳地帯が、交通手段の改良と、観光資源・観光施設の開拓・整備拡充とによって、首都圏の人々にとっての身近な観光地として発展していることが、湯沢町の地域性である、と考えられる。

北関東の山村 ——南牧村の事例研究——

鈴木里美

この論文は、北関東の山村である群馬県南牧村の砥沢部落について、周辺地域とのつながりを重視して、地域の様々な要素の関連をつかみ、その地域を総合的に把握することにより、その地域で生きる人々の生活を、時代の流れに沿って描くことを目的とする。

研究の方法は、南牧村砥沢部落148戸のききとり調査を主なものとし、加えて南牧村に関する文献や、山村に関する研究論文など、文献調査も行った。

研究の結果は、砥沢部落は、砥山の存在のため、砥石業従業者数が多く、またそれに従事するための人口の流入や、貨幣経済の浸透など、古くから一般的農山村と異なり、自給自足の生活というものには行なわれていなかった。また上州・信州間の交通の要所であり、関所が置かれ、信州との峠越えの交流により市がたち、商業も栄えていた。このように都市的要素を持つ地域であった。その後明治・大正・昭和と時代を経て、東京を中心とする交通・経済・文化体制になるにつれ、鉄道網の

関係もあり、長野との峠越えの交流が衰退し、その商業機能も衰退し、次第に不便な奥地の山村としての性格を有してきた。また、高度経済成長を経て、旧来の経済基盤であった砥石業、コンニャク・養蚕を主とする農業、薪炭業・製材業などが崩壊していき、一般的山村と同様に、挙家離村等による人口減少、それにとまらぬ過疎現象があらわれてきた。また新しい経済基盤として、富岡や下仁田への通勤などもみられた。また砥沢において特筆すべきことは、かつての大農家層の経営による下請工場（縫製・金属プレスなど）の増加である。これにより砥沢はその商業的機能を失ったが南牧村において新たに就業地としての機能を有してきた。このように高度経済成長による旧来の経済基盤の崩壊に対して、積極的に対応してきたということは、砥沢が古くから都市的要素のある商業活動の盛んな地域であったことにより、それがそこでの人々の生活や価値観の中に地域性として存在していたことによるためである。